

旭川支部活動報告

小学校部会研究部長 北海道教育大学附属旭川小学校 林 裕輔
 中学校部会研究部長 旭川市立東陽中学校 新美 雅孝

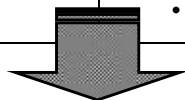
旭川支部は、旭川市教育研究会保健体育部を軸に活動をしており、100名を超える会員で成り立っている。部長、副部長、事務局長、運営委員を中心とした企画委員会を中心とし、研究委員会、事業委員会、編集委員会の3つの委員会に分かれて組織運営にあたっている。

1 旭川支部の研究

支部研究主題(令和5年度から)

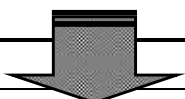
「自ら求め、豊かに関わる体育活動」～共生の視点を大切にして～

めざす子供像	
自ら求める子	豊かに関わる子
<ul style="list-style-type: none"> ・自ら目標に向かう子 ・進んで運動に親しむ子 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の違いを大切にできる子 ・多様な楽しみ方を共有できる子



【研究仮説】

教材の工夫や協働的に課題を解決する環境の設定、教師の関わりにより、児童・生徒は自ら目標に向かい、進んで運動に親しんでいく。課題解決を通して、一人一人の違いを大切にし、多様性を尊重する態度を育むことができる。児童・生徒同士の良好なつながりが次の学習への意欲を生み出し、学びが繰り返され深められていく。



研究の視点1～指導内容の工夫	研究の視点2～かかわりの工夫
① 目標や課題の適正化	① 子どもと運動のかかわり
② 個に応じた課題探究を促す教材設定	② <u>子ども同士のかかわり<重点></u>
③ 多様な関わり方を盛り込んだ指導計画の作成	③ 教師と子どもの関わり

2 令和5年度旭川支部組織

支部長	佐藤 栄一	(旭川市立旭川小学校 校長)
副支部長	堀口 創平	(旭川市立愛宕中学校 教諭)
事務局長	前川 慎也	(旭川市立神楽岡小学校 教諭)
事務局長次	上森 慎詞	(旭川市立豊岡小学校 主幹教諭)
	佐藤 研二	(旭川市立広陵中学校 主幹教諭)
研究部長(小)	林 裕輔	(教育大学附属旭川小学校 教諭)
研究部長(中)	新美 雅孝	(旭川市立東陽中学校 教諭)

3 活動報告（旭川市教育研究会保健体育部）

令和4年	4月12日	旭川市教育研究会保健体育部総会
	4月24日	北海道学校体育研究連盟定期総会参加
	8月～	小・中指導案検討およびプレ授業
	10月11日	旭川市教育研究大会（3年ぶりに対面形式で実施）
	10月27日	全道研究担当者研修会参加
令和5年	1月～3月	旭川支部の新研究主題決定に向けて会議を定期的に開催
	3月20日	企画委員会（新年度体制・定期総会について）

4 旭川市教育研究大会

1 期 日 令和4年10月11日（火）

2 研究授業	旭川市立近文小学校	清水 駿 教諭	第2学年	ゲーム【鬼遊び】
	旭川市立北門中学校	坪井 彬 人 教諭	第3学年	陸上競技【ハードル走】
3 研究発表	旭川市立東栄小学校	森 優 也 教諭	楽しく、感覚を養える準備・感覚運動	
	旭川市立東明中学校	西 宮 祐 磨 教諭	単元中における「振り返り」活動の有用性	

■小学校研究授業の概要及び重点

本実践では、「宝運び鬼」を教材に取り入れた。単元を大きく2つに分け、単元前半を課題設定場面、単元後半を課題追究場面として単元を構成した。前半は個人で考えた走り方の工夫や空きスペースの奪取の仕方を何度も試すことができ、一人一人の思いや願いを醸成しながら、よりよい動きの工夫を考えていくことができた。宝運び鬼の行い方に慣れてきたところで、全員が得点を取るとボーナス点が与えられる規則を追加した。これにより、児童は連携の必要性に気づき、仲間と協力し合い集団対集団で競い合う楽しさや喜びを味わわせることができた。



課題追究場面では、グループでよりよく課題を解決していけるように振り返り場面の設定、相互評価場面の設定を行った。少人数で連携して相手（鬼）をかわしたり、走り抜けたりする動きや、さらなる工夫に気付いている児童の考えを全体に共有し、友達の動きを「みる」ことへの関心を高める指導をした。ゲーム後に攻撃側は守備側のよりよい動きについて、守備側は攻撃側のよりよい動きについて伝え合い、対戦相手から即時的なフィードバックを得ることで、自分のチームの作戦の有効性や個人の特徴に気づき、児童はさらに動きを工夫していこうとする姿が見られた。

■中学校研究授業の概要及び重点

協働的な学び合いにより、「スピードを維持した走りからハードルを低く越すこと」を目指し、3人1組で、走者、撮影者、観察者の3つの役割分担をローテーションしながら、繰り返し考察を行う学習活動を設定した。これにより、生徒が他者の課題に係る自己の考えを整理できるようにすることができた。また、動画の撮影は再生速度を調整しながら自分の動きを確認できるアプリを活用することにより、生徒が効率的に自己や他者の課題を発見できるようにした。



課題発見や課題解決に向けた言語活動の充実を図るために、端末に模範動画をあらかじめ配信したり、技術ポイントを記載した写真を掲示したりして、生徒が自己や他者の動きとの比較が効率的にできる環境を整備した。